

1 研究の内容

(1) 部会テーマと全体テーマとのかかわり

昨年度から本校の全体テーマが「学びをあむー新領域『てつがく創造活動』を中核とする教育課程の開発ー」となったことに伴い、家庭科部のテーマを「生活の探究からあみ直しへ」とした。

全体テーマの「学びをあむ」とは、自分の思いを大切に、様々なひと・もの・こととかかわりながら新たなものを創り出し、自己を更新していくようなプロセスを指す。(要項 p.7) これに基づき、部会テーマは、家庭科の学習を通して生活を見つめ直すことから、自分なりのめあてを持って行動し、柔軟に修正しながら、自分の力で新たなよりよい生活を創造していける力を育みたいと考えて設定した。

生活を探究する、とは学習を通して生活を見つめ直し、毎日の生活の当たり前を意識化するとともに自分の生活をとらえ直して、課題を解決することである。そして、あみ直し、とは、見出された課題を解決するために、自分にとっての新たな発想で実行してみることである。編み物は何度でもほどこいて編み直すことができるように、自分なりのめあてにむかって、修正しながら繰り返しやってみることで、自分の力でよりよい生活を創造していける力を育ていけると考えた。生活の中の課題を解決する方法は唯一ではなく、ある人にとっては有効な手段もほかの人にとってはそうでないことも多い。最短で最良の結果を求めのではなく、あれこれ試しながら、より自分にあった方法を探りながら工夫し、時に失敗も楽しめるようになるとよいと思う。

昨年度は、家庭科における実習を子どもたちにとっての探究の経験ととらえ、自分達なりにめあてを持ち、試行錯誤しながら探究することを重点課題として実践に取り組んできた。新教科「てつがく」とのかかわりを追究してきた一昨年度までから、学習の出発点を「考える」ことから「まずやってみる」ことへ、転換を図って授業実践を進めていこうと考えていた。

(図1)

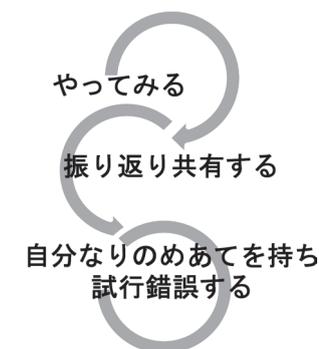


図1 家庭科における探究のサイクル（イメージ）

(2) 今年度の研究の重点

① 教師自身のあみ直し

ところが、今年度は新型コロナウイルスの感染の影響で、研究としてメインの活動と考えていた調理実習ができなくなった。さらに、感染防止の観点から、これまで自分にとっての当たり前を見直す必要にせまられることになった。

まず、自粛期間中には、子どもたちの家に郵送する課題や、オンデマンド教材を作成するため、学習計画全体を見直す必要が生じた。子どもたちが家にいるからこそ有効な題材として、5年生には教科書を読みこむ課題や、「家庭の仕事」を見つめ直す課題を用意した。また、6年生には、家庭科で学んだことを生活に生かす「ホームプロジェクト」(図2)や、個での取り組みを重視した「生活時間」についての課題、家庭での調理実習の課題を出した。

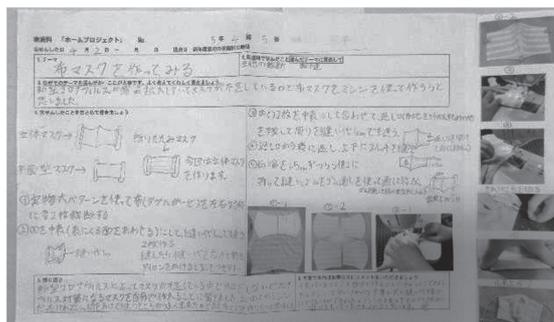


図2 家庭科の学びを家庭で生かすホームプロジェクトの作品例 コロナウイルス感染拡大の影響で、マスクを手作りした子ども達が複数いた



図3 分散登校時の裁縫実習の様子
ふだんは4人で使う机に2人ずつ対角に座って行った



図4 普通教室の授業では、基本的に前向きの一斉学習型で行う

学校再開は、分散登校からの実施となった。この時、まず、求められたのは、家庭科室の環境を整え直すことである。子どもたちが入れ替わるたびの消毒をはじめ、ひとつの机で作業する人数を4人から2人ずつに減らした。裁縫の学習は行うことができたが、これまで当たり前のようにお願いしていた保護者ボランティアも中止としたため、裁縫実習の際の示範の方法を工夫したり、指導過程や指示を変更したりした。その後、通常登校になり、現在、1つの机を3人で使用している。

何より大きな見直しを迫られたのは、グループでの話し合い活動が制限されたため、これまで当たり前のように取りまわしてきたファミリーでの学習活動を見直す必要があったことである。どのようにしたら子どもたちの安全を確保しつつ、ひとりひとりが受け身にならず、本気で取り組むことができるのか、そして互いから学び合うよさを実感できるか、を考える必要が生じた。

また、調理実習ができなくなったことを機会に、新たな題材を開発したいとも考えた。まさに、家庭部会研究テーマにあるように、教師自身が持つ学習スタイルともいべき当たり前を意識化し、見出された課題を解決するべく、新たな発想で家庭科をあみ直すことが切実に求められた。

② SDGs を学習の題材として取り上げる

SDGs とは、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載された2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標である。17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の「誰一人取り残さない (leave no one behind)」ことを誓っている。¹ 日本でも注目され、積極的に取り組む企業等が多い状況ではあるが、小学校家庭科の学習として取り上げるのには筆者に躊躇があった。それは、学習内容の空間軸を主に自己と家庭、時間軸を現在及びこれまでの生活としている家庭科において（小学校学習指導要領（平成29年告示）解説家庭編 p.17）題材として取り上げたところで、子どもたちは興味を示すのか、また、生活とかけ離れた絵空事に終わってしまうのではないかと考えていたことによる。第79回教育指導実践研究会で児童労働とフェアトレードを題材に取り上げた授業を行った際、参会者の先生方から「身近な生活とのかかわりが見えにくい」とのご指摘を受けたことが印象深い。

そのような中で、今年度SDGsを題材として取り上げたいと考えたのは、昨年度スタートしたてつがく創造活動とのかかわりにある。てつがく創造活動の目標は、自ら学びを構想し、様々なひと・もの・ことと関わりながら探究していくことを通して、社会の変化と主体的に向き合い、民主的な社会を支える市民の一員として、創造的によりよく生きるために、他者と協働しながら主体的に思考し、行動する市民性を育むことである。（要項P.9）今まさに大きく変化している社会のまっただ中にある6年生は、2030年には22歳、ちょうど社会の担い手となる。この子どもたちが、自分の生活のことだけでなく、広く地球の現状や課題について知り、今自分たちにできることを考え、小さなことでも実行してみる経験には意味があると考えた。お茶の水女子大学附属校園では連携研究の要としてエシカル消費を取り上げている²が、小学校で種を蒔き、中学校や高等学校でもスパイラルに学ぶことで、行動の範囲が広がっていくのではないかと期待もある。

また、SDGsは内容が多岐にわたるため、学習方法として、グループでの活動に頼らず、個々が主体的に探究し、それらを交流することで互いに学び合うこともできると考えた。学校での学びをひとりひとりの生活に生かし、家庭で実行することができれば、家庭科の学び（課題発見と解決）にも寄与できると考えた。

2 授業実践からみた子どもたちの学ぶ姿

(1) 昨年度5年生での実践

前述のエシカル・ラーニングラボでは、毎年、小学校5年生と附属高校1年生との交流授業を行っている。昨年度も、附属高校の生徒が小学校を訪れて、チョコレートの原料であるカカオの生産にかかわる児童労働の話をしてくれた。一昨年の夏に実際にガーナへ行き、児童労働の現場や発展途上国の現状を見てきた生徒からの話は、リアリティがあった。

この時、授業者は、事前または事後に家庭科の1時間を使って、「SDGsって何？」という話をした。

(2) 今年度6年生の実践

① 学習の流れ

ア 題材名「SDGsを身近に感じ、今とこれからの生活を考えよう」

イ 本題材のめあて

- ・SDGsについて知る。
- ・SDGsと自分の生活とのつながりに気づき、自分のできることを考えて実践する。

ウ 学習指導計画（全6時間）

- ・（自粛期間中の課題として）自分が興味をもった目標についての新聞を書く。
- ・1～4時：ひとりひとりが新聞の発表を行い、その時間の振り返りを絵だよりに書く。
- ・5時：家庭学習期間に実践できそうなことを考えてアイデアを共有する。
- ・6時：家庭で実践してきたことを発表しあう。

エ 一人ひとりがSDGs新聞を書く

まず、自粛期間中に、SDGsの17の目標のうち自分が興味をもった目標についての新聞を書く課題を出した。

オ 一人ずつ全員が新聞の発表をする

目標ごとに1時間に6～7人ずつ、SDGs新聞の発表を行った。（図5）発表時間は一人3分で、前半3人または4人の発表が終わったところで4分間質疑応答の時間を設けた。さらに後半も同様に行った。

子どもたちには発表の前に、黄色の付箋と青色の付箋を1枚ずつ配っていた。学習時間の終わりに、その日の発表の中で、自分の生活とつながりがあることに気づいたら黄色の付箋に、生活の中で自分ができそうなことを青色の付箋に書くようにした。付箋は目標ごとに、四つ切りの画用紙にまとめて貼っていった。

カ 友だちの発表について考えたことなどを絵だよりに書く

友だちの発表について今一度自分の中で咀嚼し、考えるために、次週末までの課題として教師あてに絵だより（日常的に学級担任あてに書いている絵日記のようなもの）を書いてくることにした。子どもたちからの絵だよりには、授業者が返事を書く。これを4回繰り返した。

キ 家庭で実践できそうなことのアアイデアを考えて共有する

全員の発表が終わったところで、同じ目標を発表した子どもたち同士で集まり、友だちから寄せられた振り返りの付箋を参考にしながら、家庭学習期間中に家庭でできそうなことは何かアアイデアを出し合った。アアイデアは新たに付箋に書き、全員分をまとめて印刷して配布し、家庭での実践の参考にするように助言した。

ク どんなことを実践してきたか、交流する

家庭学習期間中に実践したことをB5版1枚のレポートにまとめさせ、

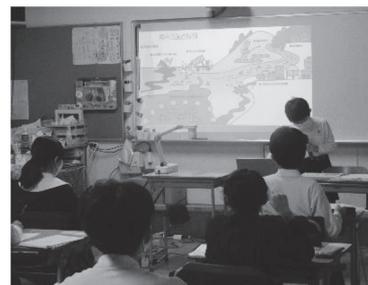


図5 発表の様子

表1 家庭での実践の例

買い物	買い物リストを作って買い物に行った・フェアトレードマークに注目し、商品を選んで買った
寄付・募金	WFP・オリーブ募金に寄付をした
食品ロス	美味しく食べきるような献立を工夫した・すぐに食べるものは賞味期限の短い物を買った・フードバンクに寄付した
知らせる	ポスターを書いてマンシヨンの掲示板に貼ってもらった・朝日小学生新聞に投書をした・家族と相談をした

学級ごとに全員分を印刷し、冊子にした。学習時には、どんなことを家庭で実践してきたか、一人ひとり紹介させた。子どもたちが行ってきた家庭実践の例の一部を表1に示した。

② 本実践を終えて

本実践における成果を三点挙げる。

一点目は、題材のもつ教材性と子どもたちにとっての適時性である。6年生の子どもたちは、教師の予想以上にSDGsを素直に受けとめ、学習に意欲的な取り組みを見せた。子どもたちの姿に刺激されて教師自身の関心が高まる実感もあり、教師が子どもと共に学べる題材であったと言える。

私は初めてSDGsと聞いたとき、とても難しくて、大人の考えるものだと思っていました。しかし、調べていくうちに、どの人にも関わり、考えられることだなと思いました。まだ、子どもだけではできないことはありますが、私が今回やったように子どもでもできることもあると思うので、そのことをこれからも続けていきたいです。(A子)

二点目は、互いの発表から学び合う中で子どもたちがSDGsの目標同士のつながりに気づいたことである。質疑応答の時間に「その目標は、他の目標とつながるところがあるか」と友だちから問われて改めて考えたり、家庭でできることを実践した中で気づいたりしていた。

今回私が様々な実践をしてきた中で感じたのが「つながり」だ。例えば、(中略) 飢餓は貧困につながる。また、質の高い教育にもつながる。また、家庭ゴミの話では、13、14、15の陸、海を守り、環境問題について考えるにもつながる他、安全な水とトイレ(6)にもつながる。衛生環境がいい街(11)にもつながり(12)のつくる責任、つかう責任にもつながる。このように一つの目標から派生して他の問題にたどりつく、つまり「全てつながっている」と私は思った。(B男)

三点目は、6年生全員に課題を課し、それらをその都度、学級全体に明らかにしたことにより、一人ひとりの持つ力が引き出されるとともに、多岐にわたるSDGsの内容をおよそ網羅できたことである。今回の発表では、意外な子どもがはっきりと自分の意見を述べている姿があり、一人ひとりが学級の学びに貢献していた。C子の振り返りにあるように、大きな課題について他者と考える時間を共有することは、学校の学びを超えて社会とのつながりが持てるという意味でも、とても貴重であると感じた。

約8ヶ月間、たくさんの催しに参加してきました。また、セブン&アイホールディングスさんの本社で発表させていただく機会もありましたが、やっぱり「協働」が大切だなと思います。もちろん調べすることも大切ですが、それを共有するまでが重要でした。(後略)(C子)

3 研究を振り返って

今後の課題としては、SDGsで得た学びをどう家庭科の実践的・体験的活動につなげ、教育課程に位置づけていくことができるのかということや、一人の子どもから指摘があったようにSDGsに対する批判的な思考を妨げない視点をもつことも必要だということである。

また、目標5「ジェンダー平等」について話し合いをする中で、顕在化したジェンダーバイアスに対しては、身近なところに隠された根強い意識を目の当たりにし、子どもたちの中にも既に強いバイアスが形成されていることに驚きを隠せなかった。生活の中の当たり前を問い直す学びは、人間形成にも大きく寄与すると思う。

この一年を振り返ると、子どもたちが、授業者がこれまで出会ったことのない家庭科と出会わせてくれた。企業の方向けへの訪問授業という経験もあり、子どもたちの持つ社会への発信力を認識した。既存の学習にとらわれることなく、これからの社会を見据えた学びをつくっていく必要がある、ということは、一昨年の授業研究会で子どもたちからもらった宿題でもあった。変化に対応するための柔軟な修正を実行するには経験と勇気が必要である。その勇気を子どもたちから得た思いである。(岡部)

ⁱ SDGsとは? | JAPAN SDGs Action Platform | 外務省 (mofa.go.jp)

ⁱⁱ エシカルラーニングラボ | お茶の水女子大学附属校園連携研究 (ocha.ac.jp)